

# モンテーニュ通りのカフェ

2008(平成20)年4月11日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★★★



監督・脚本＝ダニエル・トンプソン／共同脚本＝クリストファー・トンプソン／出演＝セシール・ド・フランス／ヴァレリー・ルメルシエ／アルベール・デュポンテル／クロード・ブラッスール／クリストファー・トンプソン／ダニ／ラウラ・モランテ／アネリーズ・エスム／シュザンヌ・フロン／シドニー・ポラック（ユーロスペース配給／2005年フランス映画／106分）

……モンテーニュ通りの由緒あるカフェ・レストランを訪れる人々を軸として展開される人間模様は実に興味深い。見事な会話劇の数々を味わいながら、「夢をかなえる人」が苦悩をもつのはなぜ？ そして、「それを支える人」が幸せそうなのはなぜ？ それを、じっくりと考えてみたいものだ。フランス映画の人間観察の奥深さをしっかり味わうとともに、映画史上に残る美しいラストシーンにも注目を！

## あ的女性監督が息子と共に！

私は女性監督ダニエル・トンプソン（DT）の名前を、おしゃれなフランスのロマンティックコメディ『シェフと素顔と、おいしい時間』（02年）ではじめて知った（『シネマルーム3』267頁参照）。映画人一家の娘としてモナコで1942年に生まれた彼女は、脚本家として活動が続けていたが、1999年に監督デビューを果たし、その2作目が『シェフと素顔と、おいしい時間』。

また、1作目も2作目も1966年生まれの息子クリストファー・トンプソン（CT）との共同脚本だったが、3作目の『モンテーニュ通りのカフェ』では、CTは共同脚本の他、フレデリック・グランベール役として出演し、この映画のヒロイン（？）ジェシカ（セシール・ド・フランス）と恋に落ちる重要な役を果たしている。プレスシートには母親DTと息子CTとの対談が載っているが、DTの両親を含め3代にわたって映画の第一線で活躍しているとはすごい血筋。すると、ひょっとして第4世代となるCTの子供たちも……？

## モンテーニュ通りとは？

私が数名でイギリス、オランダ、西ドイツ、スイス、フランスへ「ヨーロッパの都市問題」の視察旅行(?)に行ったのは、1988年8月22日～9月5日。最後の国フランスでは、当時フランスに滞在中であった東大の原田純孝先生の案内で、①イタリー地区、②ベルビル地区、③ラ・デファンス地区、④ボーグネル地区の再開発の現場を夜8時まで歩き廻った。

そんな私たちの宿泊ホテルは、サントノレ通りとシャンゼリゼ大通りが交差するコンコルド広場に面したところにある「ホテル ドゥ クリヨン」。これは、ルイ15世紀のクリヨン伯爵の城館をそのままホテルにしたという、5つ星のデラックスホテルだ。ロビーにある大理石の柱のすばらしさに感嘆するとともに、部屋の中のバス・洗面台まですべて大理石だったことにビックリ。ちなみに、原田純孝先生を招いた視察前日の豪華なワイン付き夕食は、1万2千円程度。日本のホテルでは3～5万円というところ……？

邦題に使われている「モンテーニュ通り」は、フランス最大の通りであるシャンゼリゼ大通りとクロスする有名な大通りで、世界中の女性が憧れる一流ブランド店が集まっている。また、この通りにはシャンゼリゼ劇場をはじめ、劇場、オークションハウス、有名メゾンなどがいっぱい。ちなみに、モンテーニュ通りは「ホテル ドゥ クリヨン」からもすぐ近く。たっぷり3時間をかけた夕食の後、私たちはシャンゼリゼ大通りを散歩したが、この時モンテーニュ通りまで足をのびさなかったのは少し残念……。

## カフェ・ド・テアトルとは？ ギャルソンとは？

映画の冒頭、あるナレーションが流れてくる。それは、この映画のヒロインであるジェシカに対して祖母(シュザンヌ・フロン)が語りかける「私は宝石が好きだった。ある日、私は荷物を持ってパリに出たの。いろいろ仕事を探したけど、やっと見つけたのがホテル・リッツの掃除係。セレブに憧れたけど、私にはなる術がなかったから」というもの。

そんな「励まし」を受けてパリに上京したジェシカが今面接を受けているのは、モンテーニュ通りにある有名なカフェ・レストランであるカフェ・ド・テアトル。この

由緒あるカフェは、ギャルソンすなわち男性給仕しか雇わないのが伝統だから、ジェシカのチャレンジはハナからムリ……？ ところが、どこにでも「時の運」に恵まれた人がいるもの。演奏会と舞台の初日、さらには有名なオークションが重なる日を3日後の17日に控えていたため、店はてんでこ舞いの忙しさになることを予測した店長は、やむをえずジェシカを採用したから、ジェシカもビックリ……？ そのため、ここから物語は大きく進行していくことに。

ちなみに、私がガイド本で調べたところでは、モンテーニュ通りにある唯一のカフェ・レストランは、業界人ご用達の、ホテル・コストのガルシアがデザインを手がけたラヴェニューとのことだから、ひょっとしてカフェ・ド・テアトルはラヴェニュー……？

### 原題にも人間観察の奥深さが……

この映画の原題を日本語に直訳すれば、『オーケストラ・シート』。この原題の中には、このフランス映画の人間観察の奥深さが凝縮されている。

この映画は特定の1人を主人公とするものではなく、群像劇。そして、登場人物は今流行りの言葉で言えば一見、「勝ち組」と「負け組」に分類できそうだが、そういう分類が全くナンセンスであることは、この映画を観れば明らか。この映画の登場人物たちは、「夢をかなえる人」というAグループと「それを支える人」というBグループに分けられるが、さてその意味は……？ それがダニエル・トンプソン監督が描くこの映画のテーマ。

『オーケストラ・シート』という原題は、映画の中に登場する「舞台が開く前、観客はよりいい席をと考え、前の席をとることに命をかける。ところが照明が落ちて気づくの。“近すぎると、何も見えない”というセリフに由来するもの。つまり、目の前にある幸せに気づかず、いつも遠くにある何かを探し続けている人が多いということだ。そして、どちらかというAグループに属する3人の主人公はそういうタイプ……？

### 「夢をかなえる人」とは？ Aグループの苦悩は？

この映画には、3人のAグループに属する成功者すなわち「夢をかなえる人」が登場する。第1は、3日後の17日にオランピア劇場のコンサートでベートーベンのピア

ノ協奏曲第5番『皇帝』を演奏する世界的なピアニストのジャン＝フランソワ・ルフォール（アルベール・デュポンテル）。しかし、彼は今、儀式と慣例にとらわれた従来の演奏会のあり方に疑問をもち、本当に音楽を必要とする人々の前で自由なスタイルで演奏したいと考え、その悩みを妻のヴァレンティーン（ラウラ・モランテ）に打ち明けていた。

第2は、現在テレビドラマで大活躍中の女優カトリーヌ・ヴェルセン（ヴァレリー・ルメルシエ）。しかし、彼女も自分のキャリアに満足できず、舞台稽古ではイライラのし通しで元夫の演出家とケンカばかり。ところが、「いつかホンモノの芸術作品に」と悩むそんな彼女の前に突然現れたのが、憧れの映画監督ブライアン・ソビンスキー（シドニー・ポラック）。さあ、それを知った彼女の行動は……？

第3は、初老の資産家で美術品収集家のジャック・グランペール（クロード・ブラッスール）。彼は3日後の17日、人生を賭けて収集した美術品をすべてオークションにかけて処分しようとしていたが、それは一体なぜ……？ 彼の若い愛人がヴァレリー（アネリーズ・エスム）。また、そんな父を訪ねてきたのが息子のフレデリックだが、この父親と愛人そして息子たちがオークションを前に語る人生談義はまさに奥深い……。

## 「それを支える人」とは？ Bグループの生き方は？

他方、Bグループに属するのは、ジェシカの祖母やピアニストのジャン＝フランソワの妻ヴァレンティーンたちだが、その第3が劇場管理人のクロード（ダニ）。彼女の居場所はいつも管理人室だが、そこには手紙やお花が集まり、人々が常に出入りする情報の集約地。したがって、彼女はすべての人の素顔を知る立場に。

どこかの性悪女がそんな立場に就けば大変だが、クロードは「夢をかなえる人」を見守り、「それを支える人」となることが幸せだと思えるタイプだから、そんな劇場管理人の職はいわば天職。それは、ピアニストのジャン＝フランソワを支えることが生き甲斐だと信じている妻のヴァレンティーンも同じだが、彼女の場合は、日程管理やインタビュー受付などをあまりにもきちんと守ろうとしてきたため、今夫との間に亀裂が生じてきたわけだ。

この映画は、そんな「それを支える人」たちの幸せそうな生きざまについても、しっかり描写を。

## どちらにも属さない、第3グループは……？

この映画のヒロインであるジェシカはもちろんAグループを目指しているが、人生のスタートラインに立った今はまだどちらにも属しておらず、無限の可能性をもった女性。その対極にあるのが、妻との離婚、恋人との別れ、父との確執を抱えながら次の人生を模索しているフレデリック。ジェシカとフレデリックの出会いはほんのちょっとした偶然だったが、恋の都パリでは、またこんなオシャレなフランス映画ではきっとこの2人は恋に落ちるのでは……？

もう1人、どちらかというAグループだが、Aグループに属する3人の主人公のような苦悩を抱えておらず、サルトルとボーヴォワールの2人を主人公とした新作映画に意欲を燃やしていたのがソビンスキー監督。ところが彼は、カフェ・ド・テアトルで偶然カトリーヌと出会った（カトリーヌが意図的に出会いを仕掛けた？）ことによって、大きくその映画づくりの方向転換を迫られることに。これだから、人間って面白い……？

## ついにその日が！

パリ8区のモンテーニュ通りでここ数日間を過ごしたこれらの人たちに、ついに17日がやってきた。メインの舞台の第1は、ジャン＝フランソワのコンサート会場。さて、彼は逃げ出すことなく無事演奏を成功させることができるのだろうか……？そして、それを見守る妻ヴァレンティーンの決断は……？

第2のメインは舞台上で演ずる女優カトリーヌだが、舞台の袖からソビンスキー監督が観客席に座っているのを見たカトリーヌはビックリ。もっともそれを知った彼女は、そこである覚悟をしっかりと固めたようだ。その結果、舞台上で展開される彼女の芝居やセリフは、稽古中の打ち合わせとは全然違うオリジナルなものに。カフェ・ド・テアトルにおけるボーヴォワールについての彼女独特の主張と、舞台上で展開される彼女の前衛的な(?)お芝居を見たソビンスキー監督の決断は……？

そして、第3のメイン舞台はオークション会場。美術品は順調に競り落とされていたが、妻との思い出深いブラクーシ作の石の彫像「接吻」を、息子のフレデリックが競り落とそうとした時起きたあるハプニングとは……？

こんな3人の「夢をかなえる人」たちの人生模様はいかに……？



© Copyright 2005 Thelma Films - StudioCanal - TF1 Films Productions - Radis  
Films Production Visa d'exploitation n 112436 - Depot legal : 2005 - TOUS  
DROITS RESERVES

## 見事な人生劇！ 見事な会話劇！

この映画の原題にみる人間観察の奥深さは前述のとおりだが、映画全編を通して実感するのは、見事な人生劇！ 見事な会話劇！ ということ。こんな面白い人間模様が展開されるのは、こんな有名人たちが素顔で日常茶飯事に訪れるカフェ・ド・テートルなればこそだが、そこに目をつけたダニエル・トンプソン監督はさすが！

さらにこの映画がすごいのは、①ピアニストのジャン＝フランソワと妻との会話、②女優カトリーヌとソピンスキー監督との会話、③美術品収集家ジャックと息子フレデリックとの会話をはじめ、④ジェシカが盗み聞きするフレデリックと父親の愛人ヴァレリーとの会話、⑤祖母とジェシカとの会話、⑥ジェシカとフレデリックとの会話など、その会話劇だけで面白い舞台になりそうなほど充実したセリフの数々。これは、脚本家として長年キャリアを重ねてきたダニエル・トンプソン監督が、息子クリストファー・トンプソンの新感覚も加味して練りに練った脚本としたためだが、そりゃすばらしいもの。

くだらないテレビドラマを見馴れた目には少し難しいかもしれないが、是非多くの日本人にこんなすばらしい人生劇と会話劇を味わってもらいたいものだ。

## 映画史上に残る美しいラストシーンに注目！

この映画は人生の教訓に満ちあふれたすばらしいものだが、この映画では美しくオシャレなラストシーンにも注目！ 今や立派にカフェ・ド・テアトルのギャルソンを卒業した(?) ジェシカは、フレデリックが1人待つカフェ・ド・テアトルの中へ入っていったが、そこで交わされる愛の会話の数々は……？

室内灯がともされた室内をカメラが遠くから撮ると、2人の会話は聞こえなくなってくるが、それでもなお2人の会話は継続中。しかし、そのうち会話は途切れ、テーブル越しに2人の顔が近づいていくと、当然キスシーンに。

モンテーニュ通り越しにみる、明るく照らされたカフェ・ド・テアトルの室内で交わされる2人のキスシーンはまさに最高！ こんな映画史上に残る美しいラストシーンにも注目だ！

2008(平成20)年4月12日記